

空中回廊

AICHI PREFECTURAL MUSEUM OF ART 愛知県美術館友の会 会報 MEMBERSHIP 第16号



作品寄贈のご報告

本年度も昨年度に引き続き、会員の皆さまのおかげをもちまして、友の会より愛知県美術館へ美術作品を寄贈することができました。寄贈作品は以下の2点です。

また、これに併せて作家からも5点の作品を愛知県美術館へ寄贈していただくことができました。

寄贈作品：磯見輝夫作

《鳥の如く》

1988年 木版 和紙 80.0×119.0cm

1989年リレアリナ国際版画ビエンナーレ展出品作品(別摺り)

《春の誕生》

1988年 木版 和紙 76.0×116.5cm

1988年版画協会展出品作品(別摺り)



《春の誕生》1988年 木版 和紙 76.0×116.5cm



磯見 輝夫氏

作家略歴

1941年 鎌倉市に生まれる
1966年 東京芸術大学油画科卒業
1973年 東京芸術大学版画科卒業
現在 愛知県立芸術大学教授
日本版画協会会員

作家からのおたより

磯見 輝夫

木版の制作を始めて32年の歳月が経ちました。

版画を学生時代から始める人が多い中で、28歳の比較的遅い出発でした。しかし遅い出発だったために幾許か客観的に版画を考えることが出来たように思います。

木版画での個展を三回程重ねた頃、ふとした機会に木版が私にとって単に表現方法の一つでは無く、もっと決定的な意味を持つものだと実感するようになりました。

それまでは合板の板を使って木版を彫っていましたが、手にした一枚の粗末な板が、私の意識をまったく変えてしまいました。荒く削られた板に無心に刃を加えた時、木版は私の創作の核となりました。

それ以来、無垢の板を使うことが私にはとても重要なことになりました。素材である筈の板が描く内容にまで影響を与えることも、その時知りました。板には時の流れを感じさせる何かがあって、私の版画もその中から生まれて来るように思われます。

私は版を作る時、板の内側に彫りを進めるイメージを持って版を彫ります。最近ますますその想いが強くなって、版の可能性への興味が膨らんできました。作品の内容も微妙に変わることでしょう。

1993年に愛知県立芸大に常勤として勤めることになりましたが、それまで非常勤講師として年に一度、20年程通っていました。それだけにこの度愛知県美術館に作品が収蔵されたことは、感慨も深く喜びでもあります。

今、芸大では博士課程を造り大学院を整備しようとしています。全国でも貴重な県立の芸大は規模も申し分無く、芸術大学として一級の個性的な存在になる可能性を十分に秘めています。県立美術館と芸大は愛知県の文化を担う大切な財産だと思います。関係を強めて、共に発展することを願っております。

美術課長(収集担当) 村田 真宏

美術館友の会から、昨年度の森岡完介さんに引き続いて、本年度新たに磯見輝夫さんの版画作品をご寄贈いただきました。心から感謝申し上げます。また併せて、その趣旨にご賛同いただき、作家ご本人からもさらに作品をご寄贈いただきました。友の会の皆さんから、美術館活動の根幹であるコレクション作りに直接のご支援をいただくことほど力強く感じることはございません。そして全国的にもあまり例のないこのような活動によって友の会が美術館を支えてくださっていることを誇りに思います。

愛知県を中心とするこの地方は版画の制作活動が盛んなところですが、しかしながら、これまで美術館では必ずしもその計画的な収集に取り組んできたとはいえません。今後ぜひ友の会からのご寄贈を継続していただき、それを柱にして当地方で活躍する版画作家たちのコレクションを作っていければと、またそれによるまとまった展示が行なえるようになることを願っています。今後とも皆さまの暖かいご支援をお願い申し上げます。

平成14年度寄贈者および作品 (五十音順)

愛知県美術館友の会 (磯見輝夫氏版画2点)
秋田利松氏 (川島理一郎氏油彩画1点)
磯見輝夫氏 (作家本人版画5点)
稲垣考二氏 (作家本人素描1点)
木村定三氏 (近世・近代の作品140点 [浦上玉堂4点、与
謝蕪村4点、小川芋銭19点、熊谷守一71点、
長谷川利行5点、尾崎良二13点]、古美術品
16点、考古工芸資料7点+170件)
服部修身氏 (稲垣考二氏素描1点)
ふじい忠一氏 (作家本人素描5点)
森脇正人氏 (作家本人日本画1点)

美術館長退任のごあいさつ

長谷川 三郎

愛知芸術文化センターの開館を目前に控えた1992年初秋の赴任から今日まで、いつの間にか10年余の時間を私は愛知県美術館とともに過してまいりました。この三月末には予定の任期を終えて退職の時を迎えます。

華々しい開館から現在まで、美術館を取り巻く社会的環境の大きな変動は皆様がよくご存知の通りです。けれども、そのような時代にあってこそ美術館人たちの真価が問われ、また「友の会」のような真に美術を愛する人々の存在が重要な意味をもってくださることは強調しておかなければならないでしょう。この10年をあらためて顧みますと、美術館活動のさまざまな局面で、さまざまな立場から指導助言あるいは支援協力を与えて下さった方々のお顔が思い浮かびます。中でも「友の会」創設に当って会長をお引受け下さいました故井関弘太郎先生の温顔を忘れることはできません。この場をお借りして先生をはじめ多くの皆様に心からお礼申し上げます。

愛知県美術館友の会は、「美術館活動の支援」を目的の第一に掲げて着実にそれを実現されつつあります。折しもICOMは「国際博物館の日2003年」(5月18日)のテーマをMuseums and Friendsと定め、世界の博物館と「友の会」に積極的な協力活動を呼びかけています。貴会の更なる発展を心から願っています。



ロダン
《歩く人》とともに

私のこの一点

アンドリュー・ワイエス 《アルヴァロとクリスティーナ》 内田 新哉

ワイエスの絵に出会った時から、深い森をずっと彷徨い続けているような気がする。それは触れてはいけないものに、触れてしまったような感覚だった。光より速く、心のずっと奥底に無遠慮に到達し、眠っていた感情を揺り起こしたことを覚えている。

15年ほど前のことである。言葉も喋れないくせに、僕はニューヨークのJFK空港にいた。当時のN.Y.はウォーホルやキース・ヘリング等の作品が街やギャラリーにあふれていた。時代に逆行するようなワイエス作品だが、オリジナルが見たくてアムトラックで南に2~3時間の小さな町チャップフォードにあるブランディワインリバー美術館を訪ねた。野の花が風にゆれる丘の上にぼつんと白い教会がある。どこまでも穏やかな丘や川の流れ、ワイエスの描く原風景がそこに広がっていた。落ち着いた色調の粉挽き小屋のような美術館、一步中に入ると白い漆喰の壁に木の床、踏むとギシッと静かな音が聞こえた。父ニューウェルの素晴らしい作品群を見たあとアンドリューの作品に出会った。彼の絵は静謐で堅牢、何かが画面の中で潜んでいるような強烈な生と死を想起させ驚いた。当時の僕には、到底人間が描いたものには見えなかった。

この出会いは、その後の僕の生き方を決定するのに十分だった。その後、ワイエスの原画を見るためなら世界中のどこでも出かけた。ただ1枚の絵に会うために数千キロを旅した。ワシントンで展示前の作品を学芸員の人に頼みこんで見せてもらったり、スペインの美術館で出会ったこともある。

5年前、愛知県美術館主任学芸員の高橋さんからワイエス一家とその師でもあるH.パイルの企画展があるのを聞いて訪米した。この旅では、ワイエスの住むペンシルヴェニアと夏を過ごすメイン州を訪れた。彼はメイン州

クッシングにあるオルソン家を舞台に、《クリスティーナの世界》をはじめとする多くの代表作を描いている。その中の一点《アルヴァロとクリスティーナ》が、僕のこの一点である。



アンドリュー・ワイエス 《アルヴァロとクリスティーナ》
1968年 水彩 紙 58.0×73.0cm ファーンズワース美術館蔵
©Andrew Wyeth

ルート1に沿ってファーンズワース美術館のあるロックランドへ向かった。冬のメインは暗い海や入江が見えて、枯れて淡い色調の風景がワイエスの絵のようだった。

美術館でオルソン家への手書きの地図をもらい、日没後だというのに車を走らせた。灯かりのない真っ暗な闇を走り続けると、ふと道が消えて丘に出た。方向を見失いヘッドライトを消すと、やがて星の光で辺りが見え始めた。どこか見覚えのある草原と納屋、振り返るとそこにオルソン家が立っていた。彼の描いた逆方向から僕はやってきたらしい。長い旅の末にやっとたどりついた風景だった。なぜ彼がこの家に心惹かれ描いたのか、自分自身で確かめたかった。草の上に座り、空を見上げると満天の星である。主人のいない古い家は亡霊が出てもおかしくないほど不気味だったが、恐怖はなかった。吐く息は白く凍てつく夜空に消えていった。

《アルヴァロとクリスティーナ》は傷のついた青い扉が描かれた絵である。ワイエスはオルソン家の姉弟が相次いで亡くなった後、二人の肖像画としてこの絵を描いている。作品の中の世界では、横のへこんだバケツや使い古したぼろ布、扉の傷の一つ一つにまだ体温が残っているような気配がある。光と闇の共存する画面は、生きている間の様々な振幅の大きさを感じさせる。ワイエス以外誰にも描けない、そして二人を最も的確に描いた肖像画だろう。使い込まれた道具は魂が擦りこまれ、消えてからのちその存在を強く永遠に意識できることを教えてくれる。僕は人の気配と、朽ちて消えてゆく遠い時間が不思議とこの作品に同居しているように思う。



オルソン家内部

作品からワイエスという人間が見えてくる。対象を厳しく冷徹にとらえる眼、圧倒的な筆の力、自分の衝動に正直で真摯な姿勢、深い洞察力としたたかさそして孤独。表現のために、紙を剥がしたり、絵の具を叩き付けた

り、土を擦りつけたり手段を選ばない。こどものように純粋に、描いているように感じる。純粋さゆえ、時には高い技術そのものが彼の描きたいことの邪魔になることもあるのではないかと、ふと思うことがある。

父ニューウェルの突然の死から作品は変化した。生きている時間の中で哀しみさえも受け入れながら、作品を描くエネルギーに昇華させる濃密な集中力は驚嘆するば



オルソン家外観

かりだ。何かを捨てなければ、常人にできる業ではない。人生の中で、好きなことにこれ程までにのめり込めるのは本当に幸せな人だと思う。ワイエス作品は見るたびに、日々の生活の中で生きることの面白さを知るヒントを発見させてくれることが、僕にとっての最大の魅力である。



筆者紹介

- 1960年 熊本に生まれる。愛知教育大学美術科卒業。
- 1988年 月刊『詩とメルヘン』に作品を発表。
- 1990年 第一画集を刊行。
- 1991～94年 オーストラリアのパーズに住む。以後 海外の各地取材、個展発表のほか数冊の画集を刊行。
- 現在 愛知県在住、愛知県美術館友の会会員。

ただいま準備中…

菱田春草展

2003年度展覧会のトップバッター、「菱田春草展」が開催間近となりました。

みなさんは、日本画という言葉がいつ頃誕生したのかをご存知ですか？正解は、江戸幕府が崩壊した後、明治時代に入ってからのことです。それを聞いて、意外に思われた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。もっと昔から、日本画は存在していたのではないかと。確かに、以前から伝統的な絵画が存在していました。しかし、明治維新と共に押し寄せた西洋化の波は、美術の世界にも例外なく打ち寄せ、それは伝統絵画にも改革を要求したのです。そのような風潮の中、西洋の合理的な絵画観を取り入れつつ、一方で西洋の猿真似ではない日本美術のオリジナリティを生かした「日本画」が、当時の画家たちの模索の結果、生まれることとなったわけです。

さて、その「日本画」の誕生と発展に大いに貢献した立役者の一人が、今回この愛知県美術館の企画展でとりあげられる菱田春草その人です。彼は、まだまだ新しい日本画の作風が社会で理解されない中、「朦朧体」—— 伝統の線は一切使わずに、色のぼかしによって情景を表現するという手法——を横山大観とともに発表した人物です。しかし、朦朧体という手法はその名前からもわかるように、何かぼんやりしたもの、例えば、朝もやなどを描くには適していたものの、それ以外の主題にはなかなか使いにくいという面もありました。そのような表現上の限界を克服するなかで劇的に誕生したのが、近代日本画の傑作と言われる《落葉》という作品です。今回の菱田春草展では、彼の複数存在する《落葉》という作品を同時にみることができる、今までにはない企画展となります。これがどれだけ素晴らしいことなのか、なかなか実感として湧いてこないかもしれないので、説明します。

日本画は油彩画と違い、展示できる期間が大変に限られるものだというところを、皆さんはご存知でしたか。それは日本画の絵具や、描かれている紙や絹の性質が脆弱なため、照明に長時間さらされると傷みやすいためだそうです。そういった理由から、日本画を展示しておけるのは、一年の内でもそう長くはありません。

ところが、今回の春草展では、彼の作品の中でも貴重な《落葉》という作品が、それぞれ所蔵されている美術館などから集まります。それは、それぞれの所蔵先での限られた展示期間がこの展覧会のために充てられることになるのです。これには、作



「菱田春草展」展示会ポスター

品の貸出しを許可して頂いた各美術館のご協力はもちろんのこと、そのために東奔西走された学芸員の方々の、努力の賜物であることは言うまでもありません。ちなみに、いつこの展覧会に訪れても、少なくとも4点の《落葉》を見ることができそうですが、ゴールデンウィーク中（5月1日～5月5日）には、なんと春草の描いた5点すべての《落葉》が揃うとのことですので、ゴールデンウィーク中の一日はこの菱田春草展のためにとおいてください（担当学芸員、村田さん力説）。

さあ、日本画が西洋の絵画観を取り入れたものであるということを知っただけで、《落葉》だけではないすべての日本画作品の鑑賞が、更に興味深いものになりそうだと思いますか。というのは、その事実を知っているだけで、今までは気付きもしなかったような日本画における西洋化の影響と、それを実践せんとする作家の創意工夫の跡を探すという、新たな視点での鑑賞方法が得られると思うのです。これらは是非、ご自分の目で確かめてみてはいかがでしょうか。（湯田・森）

<菱田春草展>

開催期間 2003年4月11日(金)～5月18日(日)

友の会特別鑑賞会(予定) 4月28日(月)・5月1日(木)

会員のたより

私と美術・美術館 荻野 孝

骨董好きの祖父と画家の叔母のせいで、私は幼時から絵画・焼き物等に親しんでいます。

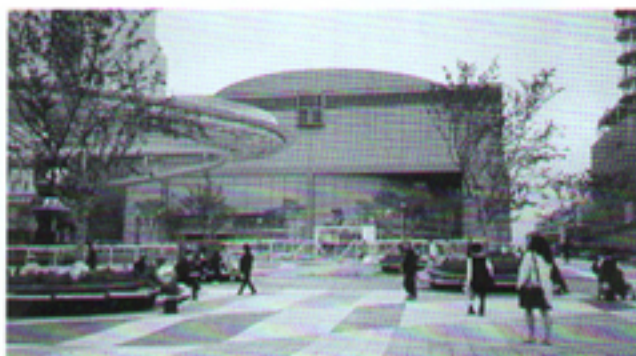
祖父は抹茶の主産地、西三河・西尾の出身だけに掛け軸、茶碗など茶の湯の道具を愛で、中学生だった私に季節々々、月々に床の間の掛け軸、器の取り替えの干伝いをさせました。数年前、愛知県美術館で催された富岡鉄斎展の時でしたか、担当の木本文平さんの、軸の扱いについての苦勞話に、私は祖父を思い出しました。

日本画の森村宜稲、狩野梅斎を好み、この二人の軸、屏風等が十点ほど。家宝級では伝雪舟の山水屏風、布にくるみ私には触れさせてくれませんでした。これらの大半は戦災で失ったり、財産税対策で手放し残念至極です。絵画は女子美術学校で学んだ叔母の、白いキャンバスにひたむきに鉛筆を運ばせ完成させていく姿を見て、私も学生時代から油絵の真似事を続けました。叔母は近く米寿を迎えますが、百号、二百号に挑んでいます。数年前、名古屋で個展を開いた折に、新制作協会の丹羽和子さんから後輩の方々のご協力を頂き感謝しています。

愛知県美術館といえば、昨秋オープンしたオアシス21のスペースに以前、二階建ての美術館と講堂、図書館からなる県文化会館があり、初代美術館長は画家の太田三郎さんでした。美術記者をしていた頃はよく顔を出し、仲間には三浦小春さん、安井収蔵さんらがいました。一階の奥まった常設コーナーには林武の《ノートルダム》、海老原喜之助の《雪山と橋》などが並んでいて、これらの作品は今も時折、対面しては往時を懐かしんでいます。当時も友の会があって、文化会館ニュース『窓口』の発行が待たれたものです。



旧愛知県美術館（愛知県文化会館）



現愛知芸術文化センターとオアシス21

その頃、名古屋市内の画廊は、昨年創業六十年を迎えた伏見の名古屋画廊の前身、美交社が広小路通り栄近くの証券会社の二階にあり、貸し画廊では名古屋三越栄本店の場所にあった文天堂画廊（後に伏見に移った桜画廊）などがある程度でした。今は亡き「桜のおばちゃん」、現代美術を育ててきた藤田八重子さんの貢献は大といえましょう。

私は、隔世遺伝？か美術品がほしくなり、四十代から版画、素描を主に集めています。自慢はジャコメッティ、ヴラマンク、ギヤマン、それに駒井哲郎、北川民次、高山辰雄、小山硬氏等。数を揃えているのは、春陽会の丹阿弥丹波子さんのメゾチントです。半世紀余も親しくしている姉の女優、丹阿弥谷津子さんとの縁で愛好者になり、各部屋に飾っています。

最近、地元で嘆かわしいニュースが起きて憂えます。名古屋ポストン美術館の浅野徹前館長の任期半ばでの辞任、ヒマラヤ美術館の閉館と三岸節子・好太郎作品の流出、それに豊橋のホテルの、やはり購入美術品の流出。美術を、美術館を愛する者として、行政、企業はじめ関係者の姿勢が問われているようで残念でなりません。

友の会活動紹介

平成14年度に行った友の会の主な事業をご紹介します。

①美術館活動の支援

- ・作品の寄贈
- ・講演会の共催



特別監査会で学芸員と

②美術館活動の普及

- ・展覧会の広報

③会員の美術に対する

教養を高める事業

- ・企画展特別鑑賞会
- ・会員限定講座
- ・会報の発行
- ・韓国舞踊鑑賞会



会員限定講座

その他

- ・懇親会
- ・美術館10周年記念品のプレゼント
- ・ショップ、レストランでの割引



懇親会



企画展に合わせ韓国舞踊を鑑賞

表紙の作品は磯見輝夫（1941-）《鳥の如く》（1988年木版 和紙 80.0×119.0cm）。平成14年度友の会より愛知県美術館へ寄贈した2点の作品のひとつ。

事務局から

平成14年度も会員の皆様や美術館のご理解とご協力により各事業を開催することができました。また、昨今の社会情勢は、美術館にとって困難な時代となっています。これらの事業内容を今後も継続していくためにも、会員の皆様には積極的に各事業に参加していただき、美術館を盛り立てていきたいと思っています。

編集スタッフから

6ページ欄外の「監視員のひとりごと」、ひょっとして私のことかもしれません。できるだけ多くの方に県美術館に親しんで頂こうと、毎回違う女性を誘って見に来ていたので、男同士で来るより絵になると思って…（森）

今回は、「作家からのおたより」を磯見さんに、エッセイ「私のこの一点」を内田さんに、「会員のたより」を萩野さんに寄稿して頂きました。また平成14年度を最後に愛知県美術館を去られる長谷川館長に、退任の言葉をいただきました。その他、菱田春草展の準備については村田美術課長に、「欄外のひとこと」を監視員の方々にお伺いしました。ご協力ありがとうございました。

編集 水野 愛子/杉山 博之/森 健次

伊奈 由希子/湯田 文

協力 愛知県美術館企画普及課

発行 2003年3月

愛知県美術館友の会

〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2

愛知芸術文化センター内

Tel 052-971-5511(代表) 内線347

Fax 052-971-5604

E-mail: tomonokai@aac.pref.aichi.jp

美術館ホームページ:

<http://www-art.aac.pref.aichi.jp/>

デザイン/レイアウト

小島 篤/桑原 房子